

文部科学省委嘱令和4年度幼児教育の理解・発展推進事業

幼稚園教育課程等神奈川県研究協議会

I 目的

幼稚園・こども園の教育課程編成及び実施に伴う指導上の諸問題並びに幼児教育を取り巻く諸課題についての専門的な講義や研究協議等を行い、教職員の指導力を高め、幼児教育の振興・充実を図るため、幼稚園教育課程等神奈川県研究協議会を開催する。

II 日程及び会場 令和4年7月25日(月) 9時15分～16時30分 小田原合同庁舎

9:15	受付
9:30	開会 挨拶
9:40	講演「幼児期において育みたい資質・能力を踏まえた教育課程の編成と幼児教育と小学校教育への円滑な接続の推進について」 講師 国立教育政策研究所 教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官 (併) 文部科学省初等中等教育局幼児教育課 教科調査官 小久保 篤子 氏
11:45	事務連絡
12:00	昼食・休憩
13:15	分科会受付
13:30	分科会開始
13:40	提案1
14:10	提案2
14:40	休憩
14:55	分科会協議 ・グループ協議 ・全体共有
15:55	指導・助言
16:15	閉会 挨拶 (各分科会ごと) *アンケート記入

【提案】

● 幼稚園の教育課程の編成及び実施等に伴う

諸課題等についての研究協議

分科会1 (共通協議主題)	〈提案1〉 秦野市立しぶさわこども園 〈提案2〉 逗子幼稚園
分科会2 (協議主題1)	〈提案1〉 山北町立岸幼稚園 〈提案2〉 関東学院六浦こども園

● 協議主題と協議の視点

分科会1 (共通協議主題)	「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について ① 幼児教育施設と小学校の先生方が、それぞれの保育・教育への理解を深め、架け橋期のカリキュラムを協働して作成するためには、どのようにしていけばよいか。 ② 「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論をもとに作成予定の架け橋期のカリキュラムと教育方法の手引き(仮案)や参考資料等を踏まえ、子供の発達や学びの連続性を確保するため、各園や学校としてこれから何に取り組んでいく必要があるのか。
分科会2 (協議主題1)	「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、幼児教育の質に関する認識の共有、家庭や地域との連携の在り方について ① “よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を各施設と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」を実現していくため、幼児教育の質に関して社会との認識の共有を図り、地域や家庭との関係においても連携を強化していくためには、どのような取組や工夫が考えられるか。 ② 全ての子供のウェルビーイングを高めることが求められている中、幼児教育施設が有する機能を地域に開放し、地域の子供やその保護者を対象に子育ての支援を充実させていくためには、どのような取組や工夫が考えられるのか。

Ⅲ 分科会の記録

令和4年度幼児教育の理解・発展推進事業（幼稚園教育課程等神奈川県研究協議会）研究成果の要旨

分科会1 (共通協議主題)	「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、 幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について
------------------	--

【提案1】 秦野市立しづさわこども園

1 提案内容

(1) 研究主題のとらえ方

「幼保小の架け橋プログラム」は、5歳児から小学校1年生の2年間（架け橋期）に注目し、この時期にふさわしい主体的・対話的な深い学びの実現を図り、一人ひとりの多様性に配慮した上で、全ての子どもに学びや生活の基盤を育めるよう目指すものである。プログラムの実施にあたっては、園と小学校が互いの専門的な視点を生かして協働して作成し、発信することが求められている。

本園におけるアプローチカリキュラムの課題を明確化し見直すために、保育教諭から見た卒園生の入学当初の姿、小学校教諭から見た1年生の姿を捉え分析すると共に、卒園生の保護者へのアンケートも参考に、アプローチカリキュラムの見直しと改善、教育実践を目指すことにした。

(2) 研究の方法及び研究の重点

①令和3年度に本園を卒園した小学校1年生の実態を探る

- ・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の目標や内容を確認する。
- ・令和3年度卒園児の保護者にアンケートを実施し、園生活を通して育った力や小学校生活の実態を探る。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を日常の子どもの姿と照らし合わせ、確認する。
- ・小学校教諭から見た児童の実態を聞き、分析する。

②アプローチカリキュラムの見直しと作成

- ・上記の研究方法を実施し、分析を進める中で、小学校へ円滑に接続するために幼児期で経験してほしいことが見えてきた。今後、分析した事柄をアプローチカリキュラムに反映させていく。

(3) 研究の内容

①令和3年度卒園児の保護者アンケートを分析する

- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をアンケート項目とし、卒園時に概ね成長を感じられたかについて回答する。また、記述回答の欄には、保護者が本園の教育に望むこと、幼児教育に期待すること、入学後に困ったことや保護者が不安に感じたことについて回答する。アンケートの結果を受けて、5領域や10の姿を意識した就学に向けてのアプローチカリキュラム作成の視点や園で取り組めることについて検討した。

<卒園児保護者からの回答>*10の姿のうち自立心を抜粋

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	保護者からの記述回答 (一部抜粋)	園で取り組めること アプローチカリキュラム作成の視点
<p>自立心</p> <p>思わない 0.0% わからない 6.1% とても思う 49.0% そう思う 44.9%</p>	<p>・子どもたちの自主性を尊重し、指導して下さったことに感謝している。今後も力を入れてくださるとよいかと思う。</p>	<p>【人間関係】 ねらい(1) 内容(2)(3) ・アプローチの時期の5歳児一人ひとりの把握を丁寧に行い、必要に応じて援助する。</p>

②小学校1年生の姿を観察し、分析する

- ・4月入学当初から約2か月間にわたり、本園卒園児の小学校での姿を観察する。観察した記録を5領域や10の姿の視点から分析し、アプローチカリキュラム作成の視点を探る。


 時計を見て、授業開始時刻が近づいていることに気づき、友達に知らせて授業準備をする姿があった。

園で見通しをもって生活していたことが生きている


 【健康】 ねらい(3) 内容(8) 自立心


 ランドセルに手提げ袋が入っていた児童がしまう場所を教師に尋ねる。教師は出席番号で伝えるが、自分の場所が分からず困っている姿があった。

園ではイラストやマークの表示が多かったけれど、小学校では出席番号など数字での表示もあるんだな


 【環境】 ねらい(3) 内容(9)(10) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

③園小懇談会における協議内容からアプローチカリキュラムを見直す

- ・例年、就学に向けての情報提供や個別のケースについての話し合いが主であった園小懇談会において、年度当初の学年通信や予定表等の資料、1日の生活の流れについて、さまざまな場面での具体的な子どもの姿等を元に懇談する。その内容を元に、アプローチカリキュラムの編成に生かせる点を探る。


 「お・か・し・も・な・か」の約束があると発言。「なんで、そうなの？」と聞くと、理由もよく理解していた。(避難訓練)


 園で災害時にどうするとよいのか教わっているんだな。(教師)


 園で身につけたことを実践する姿が見られてうれしい。(保育教諭)

★健康 ☆健康な心と体
 災害時に命を守るための適切な行動について指導してきたことが身につく、生活の場が変わっても、実践しようとしている。


 自分の名前が読めなくて困っている子がいた。


 ひらがなに興味がない子は苦しい面もでてくるかな。(教師)


 遊びや生活の中で文字に興味を持てる環境が十分にあったかな。(保育教諭)

★環境 ☆数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
 子どもの興味・関心を把握しながら環境を構成し、遊びや生活の中で文字を使う楽しさや便利さを味わえるようにしていこう。

(4) 研究の成果と今後の課題

①保護者へのアンケートより

- ・保護者の多くが子どもたちの成長を感じていることが分かった。今後、さらに園の教育、子どもの育ちについて理解してもらえような発信の工夫をしていく。

②1年生の参観や園小懇談会より

- ・保育教諭がよみ取った姿と、小学校教諭から見た子どもの姿が一致している点も多いことが分かり、本園の教育の強み、持ち味が明確になった。卒園がゴールではなく、園で付けた力を小学校でどのように発揮しているのか、一人ひとりがどう育ったのかを、しっかり見とることの大切さを実感した。
- ・今回の研究にあたり、小学校からもたくさんの協力をいただいた。園小の職員が互いの顔と名前が分かり、気兼ねなく声を掛け合い、足を運べる関係づくりができたことも、取組の成果と言える。小学校からは、参観した中での保育教諭の気づきを、ぜひ共有したいと声をかけていただいた。今後も、互いの教育を理解し合い、話し合える機会を設けていきたい。

③今後は、小学校とも共通理解を図り、連携を深めながら、園の子どもたちの実態にあった、学びがつながるアプローチカリキュラムの作成、実践をしていく。

2 研究協議内容

視点① 幼児教育施設と小学校の先生方が、それぞれの保育・教育への理解を深め、架け橋期のカリキュラムを協働して作成するためには、どのようにしていけばよいか。

視点② 「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論をもとに作成予定の架け橋期のカリキュラムと教育方法の手引き(仮案)や参考資料等を踏まえ、子供の発達や学びの連続性を確保するため園や学校としてこれから何に取り組んでいく必要があるのか

(1) 質疑内容

- ①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をもとに卒園児保護者アンケートを実施されているが、保護者が到達目標と誤解して子どもを評価することがないように意識した点について教えてほしい。

⇒保護者に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についてどの程度伝わっているのか、確認の意味でも

知りたいと考え、アンケート調査をした。また、今年度は園だよりやクラスだよりで、経験を通してどのようなことを学んでいるのかを具体的に知らせる取組を始め、理解が深まるように努めている。

(2) 研究討議

- ・幼保小がともに研究会や意見交換の場をもつことの重要性は認識しているが、小学校への入学状況が多様であることも「架け橋期のプログラム」実施の難しさにつながっている。現実的には誰がリーダーとなるのか、どのように進めていくのか等、課題が多く、踏み出せない現状がある。行政による橋渡しが必要ではないかと考える。
- ・地域により状況は違うが、園小で教育課程を交換する、研究授業や保育がある時に声をかけ合う等、できることから行っていき、少しずつ前進させていくことが必要である。
- ・公私立に関係なく、行政を中心とした幼保小それぞれの教育を理解するための合同研修会等があるとよい。
- ・共通の視点で、長期的に目指す子ども像を話し合うことにより、幼保小それぞれが大切にしていることが伝え合える。また、学びの連続性や切れ目なく子どもを支えるという意識を改めてもつことができると考える。
- ・特別支援教育についても園から小学校へ指導の過程を丁寧に引き継いだり、十分な情報交換や連携をしたりすることが必要である。
- ・幼保小合同研修会、園小懇談会等全体での情報交換のほかに、同じ立場の双方の管理職、主任、担任が意見交換していき、互いの教育理解につながっていくと考える。
- ・学びのプロセスがわかるような保育、授業を見合うことで、互いの教育の理解をしていく必要がある。教師自身で、子どもの姿や学びを具体的にわかりやすく伝えられる力をつけていく必要がある。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は到達目標と捉えられがちである。園小の教員と一緒にエピソードの分析等を行い、10の姿を視点に話し合うことで、正しい理解につながっていくと思われる。
- ・「幼保小の架け橋プログラム」の十分な周知を図り、その重要性を幼保小がともに感じる事が大切である。「幼保小の架け橋プログラム」についての理解が進むことで、互いを知ろうという姿勢が生まれる。園側からも積極的なアプローチをしていく必要がある。
- ・小学校へ園だより、クラスだよりを送付する等、園の教育を理解してもらえるように発信の工夫をしていく。
- ・保護者へも「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、園での幼児の経験を織り交ぜながらわかりやすく伝え、成長を実感できるようにすると同時に、10の姿を正しく理解してもらえるように努める必要がある。

3 指導助言より

- 基本に立ち返る大切さを認識し、幼保連携型認定こども園教育・保育要領や育ってほしい子どもの姿を全職員で確認し、共通の認識をもって研究に取り組む姿勢は、評価できる点である。
- 卒園児保護者アンケートでは「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目についてわかりやすく表している。育ちを確認するとともに課題となる部分を明確にし、子どもの姿と照らし合わせてアプローチカリキュラムに反映できるようにしている。また評価の高い項目は継続的に観察し、進めていくという方向性が見える。
- アンケートは保護者の率直な思いを知り、職員、保護者ともに教育を振り返るよい機会となった。今後も保護者にわかりやすい発信の仕方を工夫し、幼児教育の理解やカリキュラム作成の手掛かりとしてほしい。
- 小学校にアプローチし、保育教諭が小学校にこまめに足を運べる関係性を築き、生活の場面の様々な記録を残し、子どもの姿を分析している。子どもの実態をしっかり捉えようとする姿勢が評価できる。エピソード記録を分析する中で、園と小学校では子どもの育ちの捉え方の違いが明確になった。うまくいかない部分や違いに着目しながら、子どもを中心に十分な話し合いや育ちの理解に努め、解決していくことが必要である。
- 分析結果、子どもの姿、学びとの関連等を幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりに、小学校と協議、共有し合い、認識を深めながらアプローチカリキュラムの作成に努めてほしい。

【提案2】

1 提案内容 逗子幼稚園

(1) 研究主題のとらえ方

当園の位置する逗子市には現在自治体が主催する「幼・保・小連絡協議会」があり、過去には保育参観、授業参観を実施していたが、双方とも教職員配置上参観に時間を割くことは難しく、現在は行われず情報交換のみである。ここ数年は幼稚園、小学校、共に教職員不足が大きな問題になっている状況である。

以上のことから双方が円滑な接続を推進するためには、自治体の取組はもとより、まず幼稚園側は小学校で

子どもたちがどのように学んでいるのか、小学校側は教科書、時間割がない幼児教育の在り方等、互いをより具体的に知ることから始めなければならないと考えた。

(2) 研究方法及び研究の重点

①幼稚園、小学校双方の教育方法や現状を把握するため、教育計画等を交換

【小学校から】

市内の小学校1校が外部指導者の指導を得て2020～2021年にまとめた下記2点を幼稚園へ提供

- ・「カリキュラムマネジメントによる学校教育の改善・充実」
～生活科・総合的な学習の時間を通して～
- ・1年生学年日より

【幼稚園から】

本園の年間教育課程、月案、クラスだよりを小学校へ提供

幼稚園と小学校の教育計画等を交換し、教職員が読んで思ったこと、感じたこと、疑問に思うこと、質問等を情報交換した。結果、幼児期の教育においては学びが育まれる過程が一樣ではなく、育まれる姿も多様であるため、それがどのように小学校の各教科、領域へとつながっていくのかをイメージしにくいところが、学びの連続性を難しくしていると考えられた。その難しさを解消し、無理なく小学校教育に連続させるために、互いの違いや共通点を把握し、相互理解を深めることを通して、幼児教育現場ではアプローチカリキュラム、小学校ではスタートカリキュラムの編成が求められている。加えて、時代の変化により、幼稚園も小学校も放課後の子どもの遊びや家庭での過ごし方が大きく変化していることが、子どもたちの生活の背景にあることも把握することが重要と思われる。

②幼稚園において年長組保護者向けアンケートを実施

幼稚園から保護者への通信物やメールについての現状を把握するため、以下の項目についてアンケートを実施した。

- ・子どもの生活習慣の状況
- ・幼稚園からの通信物について
- ・通信物の理解
- ・教育内容の理解
- ・我が子の集団生活の様子
- ・小学校入学への期待や不安（保護者の思い）

(3) 研究内容

幼稚園の年長から小学校1年生を視野に入れて、子どもがスムーズに小学校生活に移行できるよう幼稚園と小学校が連携するだけでなく、保護者とともに取り組む必要がある。その理由として、躰や生活習慣等の自立指導は幼稚園や保育園だけではなく、保護者とともに行うべきことであり、次世代育成支援対策推進法によれば、「保護者は子育ての第一義的責任を負う」とされており、保護者が我が子に向き合い、養育に努める必要があると考えるからである。

そのためにもカリキュラムが目指す方向を明確にするとともに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、接続期に求められる資質や能力をわかりやすく示すことが必要である。

幼稚園生活においては、5領域を軸として接続期の教育内容や活動を精査し、子ども自らが進んで取り組める活動を用意する。またその活動がどのような成長に繋がるかを示すために、「保育の可視化」（動画、写真、クラスだより等）を進める。加えて、発達に課題を抱えている子、障がいをもつ子、外国籍の子、幼稚園や保育園への入園経験のない子への支援など、多様な子どもたちとその保護者に対する具体的な対応策についても具体的な提示が必要と考える。

(4) まとめと今後の課題

幼稚園の最高学年として年下の子どもたちの面倒を見られるまでに成長した子どもたちが、小学校では上学年クラスの児童に支援されながら徐々に学校生活に慣れていく過程は貴重な体験で、先輩の姿から将来の自分の姿を想像することも可能であり、双方の連携に勝るものがあるとも思われる。

各地で幼保小関係者の交流や意見交換の場を設けても、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムのすり合わせは難しく、互いに多忙で交流時間の確保ができない状況が多いと聞く。小学校入学への移行期を、不安を抱かずに過ごし、安心して学校生活に溶け込むためには、幼稚園と小学校が互いのカリキュラムを理解することが欠かせない。

幼稚園も小学校もそこに課せられる地域ごとの役割は、自治体の大小に関わらず平等に求められている。加えて、幼稚園も小学校も一人ひとりの児童への支援や対応で日々教職員は多忙を極めていく。また、自治体の担当

者も数が少なく、十分な職員配置とはいえない状況のため、今般「架け橋特別委員会」における議論は承知されているが、その具体化は一向に進んでいないのが現状である。

以上の状況を改善するために求められる策の一つは自治体への財政支援とゆとりのある職員配置が幼稚園、小学校共に必要であり、これは解決されるべき喫急の課題である。時代の変遷により幼稚園、小学校ともに1クラスの人数が40人を超えた時代から少子化の現在に至り、地域によってはゆとりのあるクラス編成が可能になっていると思われる。

一方で、子どもを取り巻く環境は多様化し、教師の担う役割もおのずと増えるため、その負担を軽減するためには多様な人材の登用が必要である。幼稚園、小学校ともに教師が本来の仕事に専念できてこそ、子どもの姿を正しくとらえることができ、子ども一人ひとりがよどみなく成長していくことが可能となる。その基本となる指導計画が互いのカリキュラムであり、連携は必須であると考えられる。

2 研究協議内容

視点① 幼児教育施設と小学校の先生方が、それぞれの保育・教育への理解を深め、架け橋期のカリキュラムを協働して作成するためには、どのようにしていけばよいか。

視点② 「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論をもとに作成予定の架け橋期のカリキュラムと教育方法の手引き（仮案）や参考資料等を踏まえ、子供の発達や学びの連続性を確保するため園や学校としてこれから何に取り組んでいく必要があるのか

(1) 研究協議

○周知の工夫、小学校との共有

- ・架け橋プランの周知を工夫し、理解し、学ぶ機会をつくる。
- ・オンラインを有効に使い、情報交換の場をもつことが大切である。
- ・10の姿を小学校の先生方はあまり知らない。幼稚園から小学校へ積極的に発信する。
- ・園だよりを小学校に送るなど、園の保育や学校の教育を伝える。
- ・何でも話し合える職員の関係をつくることで理解が深まっていくのではないかと考える。
- ・資料送付以外の交流がない現状もある。
- ・保護者への理解を深めることも大事である。

○行政との連携

- ・行政が中心となり作成への機会を設ける。
- ・モデルプランや指針等が行政から示されるとよい。
- ・行政による橋渡しを提案、実行する

○カリキュラムを作成するにあたって、共通の視点をもつ

- ・10の姿を視点とする。各担任の先生の振り返りにも使えるようになる。
- ・10の姿を全教職員だけでなく、保護者にも伝える。
- ・エピソードをもとに見取り方を共有する。
- ・教育委員会がリーダーシップをとる。

○お互いの教育内容を知る。

- ・教育課程（まずは週案）を交換、研究授業を行い、お互いを見る機会をつくる。
- ・コロナ禍で交流ができなくなっているが、コロナ禍でもできることから「架け橋プログラム」の作成を始めていく。
- ・アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムはお互いを知り、理解しないと作成することは難しい。

○情報交換の場をつくる

- ・率直に話せる関係をつくる。特別な支援が必要な保護者の情報も共有していく。
- ・それぞれの立場で話し合いを行うことが大事であるので、理解や交流の場をもつ。
- ・互いを知る必要性を感じていないのではないかと。できれば、互いを知る場を行政が担っていく。
- ・特別な支援が必要な子どもについては、担任だけではなく、管理職・主任、それぞれの立場で関わっていく。

○幼保小交流の場をつくる。

- ・教育や保育の様子を参観する機会を設ける。入学した卒園生の姿を見る機会も設けたい。
- ・お互いに顔がわかり、足を運べる環境をつくる。お互いを参観する機会は市町村主体で確保する。
- ・ふだんの遊びの様子を小学校の先生に見てもらおう。
- ・日常の保育の課題を共有することも大事だが、園と小学校との行き来を行う。

3 指導助言

- まずは知ることが大切。幼稚園は小学校を、小学校は幼稚園を知る。教育課程を作成することより、そのプロセスが大切である。小学校の先生や行政の方が興味をもってください姿勢がよい。逗子幼稚園の提案では、厳しい現状があった。これはどこの地域でもある。それを知り、どうするか、その解決に向けての姿勢が大切である。子どもたちのために園、学校全体で考えていく。
- 小学校に入学すると、先生が怖い、学校がつらい、という話を聞くことがあり、辛くなる。そのときに、幼稚園のときはどうだったか、ということを知ってくれる先生がいるとほっとする。連携を大事にしたい。
- 逗子幼稚園の「お互いを知る」という姿勢が素晴らしい。小学校の先生のコメントが素直で素晴らしい。幼稚園の先生のコメントについても率直で素晴らしい。
- 10の姿についてどう見取るかが大事である。情報共有、伝達を丁寧に行うことが大切で、お互いの違いを知ることから始まる。保護者のアンケートから保護者の実態や思いをつかみ、自治体と保護者とを取り込む必要がある。
- 保護者全体に情報が行きわたらないのは、働いている保護者が増えたことにもよる。忙しい保護者の実態は責められない。接続期には保護者と子どもの関係を丁寧に見取ってほしい。
- 小学校に入ると情報が入らないことが、保護者は不安になる。せめて接続期にはその対応を丁寧に行う。交流も大事だが、時間がないのが実状である。知るための手立てとして、印刷物という手段もある。幼稚園の先生はプライドをもって指導要録を作成している。小学校では、指導要録を見ると先入観をもつこともあるかもしれないが、そうではなく、指導要録を生かせるような指導をしてほしい。

分科会 2 (協議主題 1)	「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」における議論等を踏まえ、 幼児教育の質に関する認識の共有、家庭や地域との連携の在り方について
-------------------	--

【提案 1】 山北町立岸幼稚園

1 提案内容

(1) 研究主題のとらえ方

幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、環境をとおして行うものである。しかし、子どもを取り巻く環境は、変化が急速で予測困難な時代になっており、子どもが心豊かにたくましく生き抜いていく基礎を培う必要性は一段と高まっている。そこで“よりよい教育を通じてよりよい社会を創る”という理念を園と社会と共有し、連携・協働により小学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら、求められる資質・能力を子どもたちに育む「社会に開かれた教育課程の実現」を目指している。中でも5歳児から小学1年生の2年間(架け橋期)は重要な時期であり、子どもの成長を切れ目なく支える観点から、一人ひとりの多様性や0～18歳の学びの連続性に配慮しつつ教育の内容や方法を工夫することが大切である。

山北町では幼稚園・保育園・こども園・小学校・中学校の全教職員が「めざす子ども像」を共有し、15年間を見通した教育課程をもとに系統的な教育をめざす「0歳から15歳までの一貫教育・保育基本方針」が策定された。「社会の中で、他者とよりよく関わりながら自分らしく生きることが出来る人間力と社会力の育成」を目標に今年度より取組を始めたところである。

本園では、幼児がよりよい社会の創り手となる力を身につけるために、さまざまな人との関わりをとおして豊かな心と社会性を育むことが必要だと考えた。そのために「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の育ちに視点をおき、保育実践を重ね、子どもの育ちを幅広く発信していくことで家庭や地域との連携を深めていきたい。子どもたちが育つ「山北町=まち」を社会ととらえ、「まちの中で育つ子ども」を園・家庭・まちが一体となって支え育てるための取組や連携の在り方を探ることとした。

(2) 研究の方法及び研究の重点

①子どもの15年間を見通した成長をみとり、切れ目のない教育・保育を実現

- ・園、小学校、中学校が「チーム山北」となって、幼児教育・義務教育での「育ち」や「学び」を一体的にとらえる。
- ・つながりの中で、一人ひとりを大切にする子育て支援を推進する。
- ・豊かな人的・物的資源を活用し、実体験をとおして心が動かされる経験の場を提供する。

②幼児教育の質に関する認識の共有につながる発信や対話の工夫

- ・園の様子や子どもの育ちを伝えるために、保育の見える化を工夫する。
- ・家庭や地域向け掲示板を活用するなど、発信方法を工夫し対話を推進する。

③語り合い・学び合いをとおした深い幼児理解

- ・保育の振り返り、園内研修、他園との研修、小学校教員との情報交換・合同研修の場で保育ウェブマップを活用し、語り合い・学び合いを推進する。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を踏まえた保育を実施する。

(3) 研究内容

①子どもの15年間を見通した成長をみとり、切れ目のない教育・保育を実現

○園、小学校、中学校が「チーム山北」となって、幼児教育・義務教育での「育ち」や「学び」を一体的にとらえる。

- ・「社会の中で、他者とよりよく関わりながら自分らしく生きる山北の子ども」を育むために、園・小・中の15年間の学びの連続性と具体的な子どもの姿を家庭・地域・教職員間で共有した支援体制を作っている。町内全園・学校が公立であることから連携の取りやすさが強みである。「山北スタンダードカリキュラム」を活用し、子どもの育ちを共通な視点でみとり、日々の実践に生かしていく。

○つながりの中で、一人ひとりを大切にする子育て支援の推進

- ・日頃から子どもの姿を家庭と共有するための対話を意識している。一人ひとりに合わせた個別支援を行い、園と家庭が同じ目線で子どもの成長を支えていきたい。
- ・幼稚園は家庭と一体となって子どもと関わる取組を進め、切れ目のない子育て支援が求められている。個々ニーズは多様であることから、関連機関と連携・協力が必要である。専門的な視点からの助言を受けることで、必要な情報を得て、支援の幅を広げることができている。

○豊かな人的・物的資源を活用し、実体験をとおして心が動かされる経験の場の提供

- ・幼児期にしかできない実体験・感情体験を重ねる中で、幼児が心を動かし自分なりに感じたり表現したりする瞬間を探していく。そのために教師自身も、幼児と一緒に楽しみながら地域を知り、よさを実感し、地域の方と積極的に対話することで関係を深めたい。

②幼児教育の質に関する認識の共有につながる発信や対話の工夫

○園の様子や子どもの育ちを伝えるために、保育の見える化を工夫

- ・書面の掲示だけでなく、子どもたちが見つけた自然物や生き物を掲示したり、タブレット端末を使用して保育の様子を動画で流したりと、見たくなるような工夫を意識している。未就園児も自然と興味を持つようになった姿が見られ、親子間の会話のきっかけにもなっている。

○家庭や地域向け掲示板を活用するなど、発信方法を工夫し対話を推進

- ・園の保育活動や伝えたい情報を可視化することで、教師・子ども・家庭・地域との共有を深めたい。連携には双方の発信が必要であると考え、今年度は家庭・地域からの思いを聞き取り、保育に生かしたい。園のファンを増やし、“地域に開かれた園”“園が地域の一員”を目指す。

③語り合い・学び合いをとおした深い幼児理解

○保育の振り返り、園内研修、他園との研修、小学校教員との情報交換・合同研修の場で保育ウェブマップを活用し、語り合い・学び合いを推進

- ・職員全員で語り合うことは、他の教師の思いや新たな考え方を知る機会にもなる。保育の質やみとる力の向上、職員間の同僚性も高めていきたい。
- ・保育や行事が形式的にならないように、幼児の実態を踏まえながら“子どもにとってどのような意味があるか”“何を体験させたいか”という視点で見直したり、とらえを共有したりする。

○「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を踏まえた保育検討

- ・各視点をマークとキーセンテンスで可視化し、ドキュメンテーションに取り入れている。小学校の教員と子どもの姿を起点にした話し合いをすることで学び合い、認識の共有をめざす。

(4)まとめと今後の課題

- ・教師一人ひとりのよさを認め合い、語り合いを深めたことで保育の質の向上につながっている。
- ・幼児期だからこそできる体験によって、豊かな心を育むことができている。今後も園、地域、家庭が一体となって「まち」の子どもの成長を支えていきたい。
- ・子どもの思いやつぶやきを大切に、子どもの主体的な活動を支えながら、岸幼稚園のよさを生かした保育実践を継続していく。
- ・架け橋期の滑らかな接続を目指し、異校種間の研究会に参加して幼児理解を深めていきたい。
- ・園に通う子どもの保護者に対する支援とともに、実情に応じた地域の子育てや家庭への支援も積極的に進めていきたい。

2 研究協議内容

(1) 研究協議

視点① “よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を各施設と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」を実現していくため、幼児教育の質に関して社会との認識の共有を図り、地域や家庭との関係においても連携を強化していくためには、どのような取組や工夫が考えられるか。

○保育の可視化

- ・園の取組をドキュメンテーションや園だよりなどを通して、具体的に可視化し、家庭・地域の方等への発信の仕方を工夫することが大切である。

○地域資源の活用

- ・地域や保護者を巻き込んだ活動が大事にされている。
- ・子どもの興味・関心に合わせて柔軟に活動内容を検討し、地域のよさを生かした保育が展開されている。

○学校間の連携

- ・職員間の連携を図り、様子を見合える関係づくりができている。
- ・授業参観以外にも、園と学校間で「ちょっとってきます」という日常的な参加型の交流ができていることにより、卒園児の成長、小学校の様子を知り、会話の場を作り、子どもの育ちを共有している。

視点② 全ての子供のウェルビーイングを高めることが求められている中、幼児教育施設が有する機能を地域に開放し、地域の子供やその保護者を対象に子育ての支援を充実させていくためには、どのような取組や工夫が考えられるのか。

○地域のコミュニティの場

- ・幼稚園としての役割だけではなく、幼稚園は小学生・地域の方・未就園児にも安心できる場であり、行くと楽しいことがある場として 地域の核になることが求められるのではないかと。

○園の強みを生かす。

- ・地域のよさなど、そこにしかないものを園の活動と連携させていくことが大切である。
- ・どのことに対しても前例にとらわれず行い、進化・深化を意識することが必要である。

○教育委員会等の行政との連携

- ・自治体としてどう子どもを育てていくのかを園と学校がイメージを共有し、必要な体制づくりを進めていくことが子どもの育ちにとって大切である。

○保育の様子をわかりやすく可視化し、家庭・地域に発信することで園の教育・保育についての理解や協力につながることで改めて実感できた。しかし、園からの発信だけでは一方通行になってしまう。連携には双方の発信が必要である。家庭・地域からの思いを保育に生かすための具体的手段を各園でできることから取り組み、園から保護者へ、保護者から地域へと広げ、つなげていけるようにしたい。

3 指導助言

○山北町では、園(幼稚園・保育園・こども園)・小学校・中学校を含めて「チーム山北」とし、幼児教育・義務教育を具体的にとらえた15年間の山北スタンダードカリキュラムを作成されている。その中で、乳幼児期に育まれる非認知能力が、これから先の学びに向かう姿勢の基盤となっていることを踏まえ、園だけではなく、小学校・中学校でも認識することが重視されている。

- 幼児期の遊び・学びが小学校のどの教科につながるのかではなく、非認知能力を育てることが長い学びの基盤となっていることを町全体の取組として理解されている。
- コロナ禍で人との接触が減っている中、保護者との日々の会話が子どもの理解だけでなく、園の教育・保育への理解にもつながっている。保護者や家庭環境を理解する担当が身近なことや園の様子を丁寧に伝えていくことが幼児教育のさらなる推進や発展へと結びついていく。
- 「保護者から地域へ広がる」という意識が大事であり、保護者をとおして、園の取組等が地域へ広がり、信頼される園となる。
- 年間計画は子どもの実態を的確に捉え、教師のねらいや子どもの気づき、願い、やってみたいこと等を考慮し、少し余裕をもって作成することが大切である。柔軟な対応ができる年間計画は、子どもの願いに目を向けられる教師の育成につながるのではないか。
- ゴールを目指すのではなく、ねらいさえしっかりしていれば、ねらいを達成する過程において、いろいろな方法を取り入れることができることが、小学校・中学校との違いである。ウェブマップ等を活用し、つきたい力やねらいをしっかりと確認することが大切である。
- 園内研修では、年齢に関係なく対等な立場での話し合いができています。研究テーマ・主題を教職員が共有し、目指す方向が同じであれば、それぞれの教師の持ち味や長所・特徴・個性を認め合いながら日々の教育・保育を実践していくのがよい。そうした取組で、職員一人ひとりが輝き、充実感、達成感が味わえる。
- 小学校の授業は45分の勝負であり、一つのねらいをもって目標の達成を目指していくが、幼稚園は長いスパンで総合的に取り組み、ねらいを達成していくものである。それぞれの研究会に参加し、お互いの教育の特性を知り、めざす姿や教育・保育の内容のより一層の相互理解を大切にしたい。

【提案2】

1 提案内容 関東学院六浦こども園

(1) 研究主題のとらえ方

現代に生きる子どもたちの周囲にある社会状況は、急速なスピードで変化している。子どもたちの成長の過程として、周囲の影響を受けながら新たに自分を確立し始める10年後、社会の一端を担い始める20年後の社会がどのような状況になっているか想像つかないほどである。この社会に対応するためには、乳幼児期に育まれる人格形成が大きく関わっている。幼児教育でも、また小学校教育でも、社会の多様な変化にも柔軟に対応できる資質・能力を育むことが求められている。

乳幼児期に育まれた豊かで柔軟な人格の基礎は、将来自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の作り手となっていく。教育目標である「主体性・創造性・思いやりの心」のもと、本園は、子どもの心豊かな育ちを保障しつつ、地域の子育ての拠点となることを目指し、保育実践を重ね、園の形態を変化させてきた。地域や家庭との在り方、認定こども園の独自の働きを踏まえつつ、本園の保育実践を振り返りながら幼児教育の実践について考えた。

(2) 研究の方法及び研究の重点

本園ならではの「保育の質」を、家庭・地位との連携という視点から振り返り、子どもの育ちに生かされている園の姿を明らかにし、今後必要とされる機能や園の働きを追求していく。

- ①園の文化として積み重ねてきたことと、近年の実情に合わせ変化してきたことを家庭や地域社会との連携という側面から明らかにし、検討を行う。
- ②周辺地域との連携協力のもと、教育や保育の中で取り組んでいる実践と、日々の生活で繰り広げられる子どもの姿のつながりを、架け橋期の探求性や協同性という視点をもとに検討する。
- ③乳幼児期の教育、保育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものとしての認識を再確認し、家庭との連携の中で育まれる人としての「土台」に着目し事例検討を行う。

(3) 研究の内容

- ①子育て社会の状況変化に対応できる園の構築 —地域や保護者とのつながり—
 - ・未就園の親子が集う場の開催（安心できる親子の居場所づくりと子育て世代同士の親交流の場）
本園ならではのダイナミックなアート活動、園庭遊び、感触遊び等を展開し、毎回の活動の願いや思い、また子どもの姿から読み取り感じたことをドキュメンテーションとして発信。
 - ・対話できる家庭との関係づくり（ホームページ、園便り、クラス懇談会（年3回）、クラス便り）

懇談会では担任が保育を語るだけではなく、保護者同士のグループワーク、感想を募り相互関係を構築するために実践。

- ・こども理解を深める園庭環境づくり（冒険遊び場的な園庭）

園庭改造、園内研修や他園見学研修を「お父さんの会」と共に行い保護者と職員が子どもの育ちを対話していく機会を設ける。変化に富んだ園庭で年長児は生活に期待をもつようになり、挑戦を繰り返す中で自分や友達の力を知り、友達と励まし合い喜んで生活する姿がある。

以上3点の取組や実践を持続し積み重ねていくことで、園の保育に賛同し本園ならではの子どもの育ちを理解した保護者が地域の中でさらに発信の担い手となり、園のコミュニティが地域へも広がっている現状が分かった。

②架け橋期の探求や協同～地域社会と活きた関係から～

【多種多様な本物に出合う経験を積み重ねる年長児】

園生活は常に変化に富み、特に年長児は周囲の物事に興味をもち関わり続けながら生活している。毎日の遊びの中で、心を動かし感性を働かせ、感じたことを表現したり、友達と協同して目的を共有したり、自分の考えを言葉で表現し相手に伝えようとすることを楽しむ。このように喜んで生活することが小学校以上の学びや生活の基盤になるのであろう。遊びこそ豊かな学びの場と捉え、保育者は日々の園生活を共に作り出す大人として、子どもの「心の声」を常にキャッチしようと表情や身体の動き、小さなつぶやきにも目を凝らし耳を澄ませ、子どもと共に心を動かす存在でありたいと考える。

生活の中のアート
(アート講師・芸術家)
→自然との関わり
豊かな感性と表現

ワークショップ
(建設会社・大工)
→自然との関わり
生命尊重
協同

地域で活動する行事の計画(冒険遠足)
→社会生活との関わり
協同 思考力
言葉による伝え合い

本物に出合う 学びや生活の基盤へ

架け橋期へ 学びや生活の基盤作り				
自分作り				
人としての土台となる感情を抱く				
対話 (自分・他者・モノ)	挑戦と失敗	自分の力を 知る	協働	自分で選択する 「やる」「やらない」
本物を感じる・知る				
安心・安定 ありのままの自分				

③人格形成の基礎が育まれる

～豊かな架け橋期を迎えるための土台～ A児の事例より

乳幼児期の人格形成の基礎に関わる大人の存在は重要である。中でも集団生活に入った時に会う大人の存在は子どもの安心や安定に重要な役割を担っている。家庭で育まれてきたこれまでの生活力や安心感を礎に、新たな環境の中で生活を始める時、大人がいかに傍らに存在するか常に考えていたい視点である。共に生活を作る者として子どもの姿や思いを尊重しながら、また生まれながらに備えている「育とうとする力」を発揮できる関係を築くことが大切だ。また常に願いをもって関わることの重要性も感じる。一人ひとりの将来像、生きていく力を想像しながら関わり続けることで子どもの力が豊かに発揮され、一人ひとりが集団の中でいきいきとした生活の作り手になることができる。と考える。

またどのような心もちで、どのような願いをもって共に生活をするかという保育者の姿勢や子どもへのまなざしや考えを保護者と共有することで家庭から安心して送り出すことにつながるだろう。

保育者一人ひとりも乳幼児期の人格形成の基礎に関わる者として学び続ける姿勢をもつこと、保育者同士の連携の中で多面的に子どもを捉え続けようとする保育者チームの姿勢も重要になる。そのための園内研修や情報共有の場、チーム力を高める取り組みを継続している。また保育者だけでなく、子どもに関わる大人が立場の違いを超えて自分事として連携・協働し、この時期にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人ひとりの多様性に配慮した上で全ての子どもに学びや生活の基盤を育めるようにする。本園では乳児担当、幼児担当の枠を超え、また職種の枠を超えて子どもに関わる教職員が対話する機会を設けている。

架け橋期の重要性は確かではあるが、幼児期を豊かに過ごすためには幼児教育の質が重要である。それをなくしては幼保こ小の教育のつながり、また連続性が保たれないだろう。育ちの連続性が乳幼児期から始まることを再認識して取り組んでいきたい。

(4) 研究の成果と今後の課題

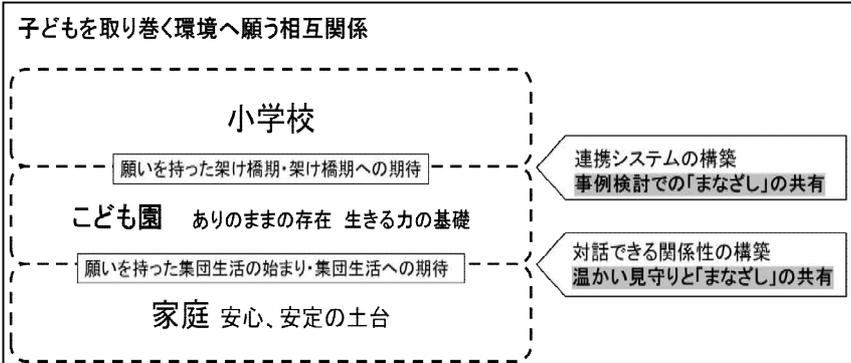
本園の子どもたちは遊びを生活の中心に据え、周囲の物事に喜びをもって自ら関わろうとする力を発揮している姿が事例研究を重ねる中で見えてきた。初めての集団生活で不安や心配を抱えながら入園した子も親も、共に考え悩み、ありのままの姿を認め共に歩もうとする保育者や職員に出会うことで、自分の世界を広げようとし、さらに豊かな周囲の環境に関わろうとすることが分かった。ここで大切にしたいのは「共感」である。不安や緊張、心配を前向きに変換させようとするのではなく、不安は不安のまま受け止めてもらうことで、「このままの姿でよい」ことを感じ、「分かってもらっている」という感覚を得て、徐々に安心へとつながっていくと考えた。

また、ここに身近な保育者だけでなく子どもに出会う大人が立場を超えて連携し関わることで安心の場がさらに広がり、生活の基盤づくりの一步となる。家庭から集団生活へ踏み出すこの時期の捉え、また関わりなくしては土台作りが始まらないであろう。この認識を互いに共有しながら、保育が展開されることも保育の質を高める一端となっている。

また、年長児は遊びや集団活動の中で自分の園生活を作り出そうとする姿が多く見られた。周囲の友達や環境から影響を受け、その物事に自分がどう関わろうかと考え、時には思い通りにいかないことも友達や保育者とこれまでの経験を活かし、考えを重ねる中で自分たちなりの面白さにたどり着き、生活を自分の手で充実させる姿に出会えた。これは小学校以降の生活や学習においても重要な自ら学ぶ意欲や自ら学ぶ力を養い、子ども一人ひとりの資質・能力を育成することにつながっていくのである。

周辺地域の子育て状況の変化と共に園の機能や存在意義が変化しつつあることを再認識した。以前から行っている取組を活かしながら、多様な変化を遂げる社会状況に対応できるよう保育の質を保ちながら柔軟性を兼ね備えていきたい。従来から行ってきた保護者との連携の為の取組が、時代が変容しても効果が保たれていることが見えてきた。今後の変化が想定できない社会状況ではあるが、これまでの取組を再考し続けながら様々な変化に応じられる園の力を蓄えていきたい。そのためには在園児の保護者はもとより、卒業生やその保護者にとっても拠り所になるような園の存在、また地域社会に乳幼児教育の魅力や子どもたちの豊かな成長を発信し続けられる園であることが求められる。また、保育者も一人の人間として成長し続けられる園内外の「学びの体制」、互いの力を活かしあえる「教職員チームの育ち」を追求し続けていきたい。今後、子どもも大人も互いに認め合い育ち合える環境とまた地域の受け皿となってその環境を園から発信し続けていく。

架け橋期を支えるために重要とされる幼保こ小連携はシステムの構築だけではなく、事例研究などを通した子どもへのまなざしの共有、子どもの力を切れ目なくのびやかにつなぐ、育ちの連続性を理解し合う相互関係が特に重要だと分かった。



2 研究協議内容

視点① “よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を各施設と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」を実現していくため、幼児教育の質に関して社会との認識の共有を図り、地域や家庭との関係においても連携を強化していくためには、どのような取組や工夫が考えられるか。

視点② 全ての子供のウェルビーイングを高めることが求められている中、幼児教育施設が有する機能を地域に開放し、地域の子供やその保護者を対象に子育ての支援を充実させていくためには、どのような取組や工夫が考えられるのか。

(1) 質疑内容

①園庭作りでは、父親の力も再認識した。子どもの限界を自分自身がわかって、挑戦する、挑戦しない、を決めるという大切さを感じた。園庭遊具を作る際、危険性と安全面の工夫を教えてほしい。職員間の共有や工夫を知りたい。

⇒子どもの動き、つぶやきをよく見ることで子どもの力を信じていいと改めて感じている。「大人が力を貸さないこと」を約束に子どもの傍にいる。毎年職員もかわり、非常勤職員もいる中で共有を図っている。今年是非常勤の先生と交換日記に挑戦している。

②お父さんの会についてだが、外部の人との距離感、教育の理解など、どのように考えているのか。

⇒卒業後も園に通ってくれている。距離感は難しいが、お父さんたちは客観的に子どものこと、園のことを考えてくれている印象がある。自然とよい距離ができています。お父さんから園の理解が進むと母親の園理解が進むような実感もある。

(2) 研究協議

- ・保育の可視化、園の取組の具体化、地域の方の参加をどう促していくのか考える必要がある。
- ・保育の可視化についてだが、写真を通して地域を知ることや、保護者に伝える大切さを感じた。可視化することで、皆で共有できることがある。短い時間で職員間でも共有ができるようにしたい。
- ・園の方から育てた野菜を配布したり、地域に出かけて繋がりをもてたりする工夫をしている。

- ・発信力と工夫が必要ではないか。ドキュメンテーションの作成や回覧板で園の便りを地域へ伝える、など工夫している。また、保護者の方の力も借りることをとおして、一緒に巻き込んでいくことで園の理解が進んでいくのではないか。
- ・少子化の中で園児のことではなく、地域の子どもの拠点、地域の核になることが求められている。
- ・異年齢交流などいろいろな立場の方を巻き込む大切さも感じている。
- ・自治体としての発信も重要である。
- ・ドキュメンテーションなどを通して可視化し、園の現状を知ってもらうことで、子ども同士のトラブルなども保護者と一緒に考えていけるようにしたい。
- ・授業参観など、幼保小職員が互いに園や学校の様子を見られるようにして交流を深めている。
- ・園生活から小学校に行くときまでは園できていたことが、小学校では、上の学年がやるから、自分でやる必要がなくなる場面がある。小学校とも共有していく必要がある。園を理解してもらう必要性を感じる。
- ・園の様子を地域や親にどう理解してもらうのが課題である。
- ・園の活動の中で保護者の参加を促す。地域性や園の実情はあるが、園の強みをどのように生かせるのか。
- ・新しい取組をしてくときに、前例にとらわれずに進めることが大切である。継続と進化を大切にしたい。地域を大切にしながら進化を進めていきたい。
- ・幼稚園、保育園、こども園だからできるではなく、各園だからできる取組を考えたい。

3 指導助言

- それぞれの発表の違いを感じた。提案1での発表は地域性が残っている暖かさを感じる。横浜は園も多く、地域性がある。また、私立園であるということも難しい面でもある。
- 幼児教育の質とは何か。質という言葉の危険性がある。質は品質管理で使われる言葉でもある。今、幼児教育・保育の役割が問われている。何をもちて質が高いというのだろうか。
- 遊びが学びである。「学び」とは何か。遊びの重要性をどこまで教育委員会や保護者と共通理解できているのか。教えることこそが教育という考え方も強い中で、乳幼児教育・保育の重要性をどこまで地域社会にわかってもらえているのか。また、対話とは、異質さを受け入れることである。
- 主体性の重要性と内発的動機付けについて。主体性は内側から湧いてくるやる気、意欲のこと。内発的動機付けというのは、おもしろいからもっとやってみたい、やってみようというやる気のこと。
- 子どもの姿をどう見るかが問われている。園から送り出した子どもたちを小学校がどう受け止めるのが重要である。
- 勉強とは、何か。社会における何らかの外的基準から「のぞましい」とされる知識や技能を、他者からの教示にしたがって、練習を通して、獲得すること。必ず「教師」がいる。必ず「正解」がある。「正解」が出せるように練習する。「正解を出す力」＝「能力」を身につける。
- 架け橋プログラムの意味。新たな学習指導要領の改訂や、個別最適な学び・協同的な学びを実践していくうえで、小学校段階以上の教育に、幼児教育の考え方が広がっていくかどうか問われている。子どもが学ぶ、育っていくことのおもしろさ、魅力の発信が重要である。
- 幼稚園における子育て支援とは何か。子育ての大変さを引き受けるだけでなく、子どもという存在がどれだけ魅力的かを伝える役割を果たす。保護者に保育のことをきちんと伝えていくこそが本来の子育て支援である。保育参加、サークル活動などを通して、保護者が子どもと関わる楽しさを知る。園の大変さに共感する。サークル活動等で、異年齢の保護者同士が関わる機会をつくるのが、そのまま子育ての経験談を話す場となり、子育ての支援になることが多い。保護者が自分の子ども以外の子どもと関わる経験をする中で、子どもとの関わりを通して、地域、社会に関わる楽しさを知る。
- 地域の子育て支援の担い手を送り出していくのも、幼稚園の役割である。小学校でも理解され、協力、参加してくれる保護者を増やしていく。子どもを通して、保護者同士の関係を広げ、新たな地域を築いていく。子育て支援の支援をしていくことは、幼稚園の大きな役割である。配慮の必要な子どもや外国籍の子どもたちと関わり合う中で保護者も含め、多様さを認め合う社会を認定こども園や幼稚園、保育園から構築していく。子どもの成長を語るときに、幼児期のエピソードがない、または語れない保護者をつくらないことも重要である。